

2018年8月3日

# 陳 述 書

氏名 川 崎 栄 子

住所 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 4階  
早稲田リーガルコモンズ法律事務所気付

## 1 はじめに

私は17歳のときに家族に先立ちひとりで北朝鮮へ行きました。私は北朝鮮は楽園だという宣伝されていた内容をまったく疑っていなかったため、北朝鮮に到着して実際は宣伝とはかけ離れた状況であることに非常に驚きました。当然、地上の楽園などという宣伝の内容が虚偽であることを知っていたなら、私は決して北朝鮮へは行きませんでした。

私の現在の最大の希望は、生きて子どもや孫に会うことです。子どもや孫たちが無事にいるか、心配で毎晩眠れないでいます。

## 2 生い立ち

私は、1942（昭和17）年7月11日、京都府で在日朝鮮人1世の父と母の下に生まれました。5人姉弟の1番上で、弟が4人います。当時の在日朝鮮人の家庭の例にもれず私の家庭も貧しかったのですが、父母の仲は良く、貧しくとも幸福に生活していました。

私が京都府の公立小学校及び中学校を卒業した後、家庭の経済事情が悪化し、私は高校進学を諦めなければならなくなりました。しかし、高校にはどうしても進学したいと思っていたところ、ある日家を訪ねてきた朝鮮総連活動家が京都朝鮮人中高級学校高等部（以下「京都朝鮮学校」といいます。）の入学試験を受けることを勧めてくれました。私は勧めに応じて受験し、トップの成績をおさめました。そして、同校に特待生として入学しました。

## 3 北朝鮮へ行く決意

私が京都朝鮮学校に入学した当時、朝鮮総連を中心として、在日朝鮮人が北朝鮮への「帰国」するよう、北朝鮮が「地上の楽園」であることが盛んに宣伝されていました。朝鮮総連は連日大会や集会を繰り返しており、それに応じる形で日本の国会や地方議会が賛成の決議をし、各政党や労働組合等も熱心に活動するなど、お

祭り騒ぎのようになっていました。

京都朝鮮学校の教員はその多くが朝鮮総連の組織人であったこともあり、学校では毎日「帰国」を煽動する議論が一日中行われていました。私たち生徒も、家族や近所の人々に「帰国」を呼びかけるように言われていました。

当時の在日朝鮮人の多くはこの宣伝を心から信じており、それは私も私の家族も例外ではありませんでした。私の家族は、一家で北朝鮮へ「帰国」することに決めました。父は17歳くらいから母は3歳くらいから数十年間日本に在住していたため、日本での生活を終えて北朝鮮へ引越しをするためには準備期間が1年ほどは必要と考えました。私は、一刻も早くそのような場所に行きたい、1年も待てないと考えて、両親に私だけ先に行かせてくれるよう頼みました。私は北朝鮮ではすべての自由も生活も政府によって保障されると信じていたため、高校生でも一人で先に行くことに不安はありませんでした。両親は、1年後には残りの家族全員が「帰国」して私と一緒に生活するという約束をし、私だけ先に行くことを許してくれました。

#### 4 北朝鮮へ出国

1960（昭和35）年、私は北朝鮮へ出国するため当時運行していた帰国者専用の特別列車に乗り、京都から新潟へ移動しました。家族は特別列車には乗れず新潟までは来られなかったため、京都駅で見送りを受けました。

同年、私は新潟港から帰国船に乗り、北朝鮮へ向けて出国しました。高校3年生になったばかりの17歳のことでした。

#### 5 帰国船上

帰国船には海上保安庁の巡視船がついていましたが、公海まで来たところで、海上保安庁の人たちがメガホンで「ここからは公海です。みなさんお元気で。さようなら。」と言い、帰国船に向かって手を振ったのを見ました。

公海に出て1時間程経った頃、船内で日本から持ち込んだ食べ物は全て海に捨てるようにという指示が出ました。北朝鮮は日本の植民地だった国だから日本の食べ物を見ると気分良く思わないからだという理由を説明されましたが、食べ物を捨てるなんて私にはまったく納得がいきませんでした。しかし、多くの人が食べ物を捨て、船の周りは風呂敷包みなどがぷかぷか浮いている状態になりました。

その後、船内では子どもたちをはじめ多くの人が船酔いになり、食堂で出された食事が食べられなくなりました。帰国船の従業員は皆ソ連人であり、彼らの作る食事が口に合わなかったためです。帰国者が食事に困ることは、帰国船の中から始まりました。

## 6 上陸直後

船酔いを経て、私は北朝鮮清津港に上陸しました。

下船時にすでに降りるのを拒否し日本へ戻ることを希望した人がいましたが、その人はその場で捕まり強制的に下船させられていました。

私は、船上で京都朝鮮学校の上級生2人と会い、彼らと行動をともにしていました。帰国船が岸壁に着いた時、彼らの同級生で先に北朝鮮へ行っていた人が岸壁に立っており、私たちに向かって「3人とも船から降りてくるな。そのまま日本に帰れ。」と怒鳴っていました。しかし、当時の私にはその人がなぜそのようなことを言ったかはまだ理解できませんでしたし、仮にできていたとしても下船しないで日本に帰ることは不可能でした。

## 7 家族へのメッセージ

北朝鮮に着いてすぐに、日本で宣伝されていたことはまったくの虚偽であったと気付きました。私は宣伝を完全に信じていたため大変に驚きましたが、まず考えたことは、すぐに私を追って北朝鮮へ来る予定の家族を止めなければならないということでした。

私は、あの手この手を使って「北朝鮮へ来ないように」というメッセージを家族へ伝えました。当然、直接的に北朝鮮へ来るなという内容の手紙を書くことは許されませんでしたので、当時小学校4年生だった弟について「弟が結婚したらお嫁さんも一緒に会いましょう」、「祖国が統一したら会いましょう」などと、遠い将来に会おうという内容の手紙を何度も繰り返し書きました。私の両親は、私がこのようなことを言う訳はない、私は家族に対して北朝鮮へ来ないようにと伝えようとしているのだと理解してくれ、北朝鮮へ行くことを中止しました。

両親が私のメッセージを理解してくれていたことは、ずっと後になって両親の知り合いが北朝鮮へ移住して来た時に、出発前に両親から「北朝鮮へ行った娘が来ないようにと言って来ているので、あなたも行かない方がいい」と告げられたと言っていたのでわかりました。その人は両親の助言を聞かずに北朝鮮へ来たことを後悔していましたが、後の祭りでした。

## 8 高校3年生

### (1) 学校

私は、平壤から500キロ程離れた地方都市を居住場所として指定されました。その地方都市に来たとき、私は「何百年も前に来てしまった」と感じました。しかし、私は日本で朝鮮学校に通っていたためにその地方都市に住めることになったようで、その地方都市は他の場所と比べると格段に良い場所でした。

私は、その地方都市に1つしかない高校に編入することとなりました。北朝鮮の学校は7月までが1学年であるため、私はその学校に数か月間在籍しました。

### (2) 寄宿舎

私には同行した家族がいなかったため、寄宿舎に入ることとなりました。高校には寄宿舎はなかったため、当初私は1人、師範学校の寄宿舎に入れられる

こととなりました。

しかし、与えられたベッドから虫が大量に出て来て、寝ている間に布団の中で虫がもぞもぞ動くのが感じられる程でした。翌朝起きてみると、ナンキンムシに身体中食われてしまっており、身体中が腫れていました。同じ寄宿舎にいた現地の人たちはまったく食われておらず、ナンキンムシに慣れていない私だけが身体中食われていました。

そのため、師範学校の寄宿舎から専門学校の寄宿舎に移動することとなりました。その寄宿舎には日本の各地の朝鮮学校から来た帰国者の高校生が集められており、女生徒が6名か7名、男子生徒も同数ほどいました。同じ境遇に置かれた者同士で一緒に生活することができたことは、私の心の支えとなりました。

### (3) 食糧事情

寄宿舎での生活で1番困ったのは食べ物でした。私を含む帰国者には、塩で味付けしただけのジャガイモやトウモロコシなどの寄宿舎の食べ物が身体に合いませんでした。そのため、時折様々な物を闇市で手放し、そのお金で食堂に行って食事をしました。そうやっていたために、酷い栄養失調になるのが辛うじて避けられたのだと思います。

寄宿舎の専門学校生の中には海外から帰国した人たちも多くいたが、北朝鮮での食生活にうまく適応できない人たちが栄養失調で起き上がれなくなるということが多くありました。その人たちのために日本からの帰国者たちが食券を購入し、食堂に連れて行ったりすることもありました。

日本からの帰国者たちの多くは、食べ物が合わなかったせいか、肝臓病になりました。結核になった人も多かったし、ホームシックから精神を病んだ人もいました。

#### (4) 大学受験

大学入試は学校から推薦されないと受験ができないシステムでしたが、私は、住んでいた道（地域）から金日成総合大学を受験できる5名のうちの1名となりました。5名は全て日本の各地域の朝鮮学校で成績最優秀だった人たちでした。

しかし、結果発表の時にこの5名にだけ通知が来ず、1か月後に全員不合格と通知されました。その後、市の労働党教育課から呼ばれ、私は金日成総合大学以外ならどこでも好きな大学に行かせるが、他の4名（いずれも男性）は全員就職するようにと命じられました。私は金日成総合大学に不合格であったことに納得がいかず、翌年に再受験を希望するから1年間は就労させるよう求めました。一方、4名はいずれも大学に進学するために北朝鮮へ来た人たちでしたので、就職することには納得できず進学させるように求めました。しばらくしてから、4名が私を他の大学に行くように説得したら4人も大学に進学させるということになり、4人の説得に負けて私も金日成総合大学ではない大学に進学することにしました。

後からわかったのですが、金正日が金日成総合大学に在籍しており、日本からの帰国者のような信用できない者たちと一緒ににはできないということが理由だったようです。

### 9 大学生活

#### (1) 専攻

私は、北朝鮮の現実がわかった時にこの国の政治には賛成も協力もできないと考え、思想の関連する文系は専攻しないことを決意しました。そして、化学機械を専攻しました。大学は4年間通いましたが、私が入学した当時、私の学部の学生1000名中女性は8名に過ぎませんでした。

## (2) 部活動

私は、時間を持て余したため、部活動でテニスをする事とし、全国大会にも出場する程になりました。当時は学生のスポーツが活発であり、大学でもスポーツ選手の寄宿舎は別に用意されていました。食堂でのメニューは栄養管理されており、そのために私は極度の栄養失調にならずに済みました。

## 10 職業生活

### (1) 就職

北朝鮮では、就職先は国から一方的に決められるものでした。私が就職させられたのは北朝鮮で1番大きな機械工場で、大型機械の設計を担当しました。生活は苦しかったですが、仕事自体はやり甲斐のあるものでした。しかし、自宅から距離が遠かったため、市内の工場に移動しました。

### (2) 朝鮮労働党員候補

私が帰国した当初、帰国者は朝鮮労働党員（以下「労働党員」という。）になることはできませんでした。しかし、数年後から帰国者も労働党員になることができるようになり、職場で労働党員である上司が3年間様子を見て推薦できる仕組みになっていました。

私は勤勉でしたので、帰国者が労働党員になれるようになった当初から労働党員の候補とされていました。しかし、私は、北朝鮮の政治に対する反対の意思から、労働党員には決してならないと固く心に決めていました。労働党員になりたくないなどと考えていることが知れたら粛清の対象とされることが明らかでしたので、常に労働党員になりたいと考えているふりをして、最終的には労働党員にはならないようにしなければならなりません。

そこで、私は、3年程勤務して労働党員の候補にされると、その度に理由をつけて転職するという事を繰り返した。転職すると3年間のカウントが戻さ



れるためです。また、3年経たずとも上司が替わってもカウントが戻されるため、勤続3年になる前に上司が替わる場合には次の上司で3年になるまで転職しないことができました。女性は比較的容易に転職が認められたため、私は最後まで労働党員にならずに済みました。

## 1 1 婚姻生活

### (1) 「成分」

北朝鮮では、「成分」と呼ばれる社会的身分によりすべてが区別されましたが、帰還事業で北朝鮮へ「帰国」した人々とその子孫は「帰国者」と呼ばれ、最も低い「成分」として差別の対象とされました。北朝鮮の現地出身者が帰国者と婚姻した場合、その者も朝鮮労働党員になることができなくなりました。労働党員でなければ人にあらずというような風潮のある北朝鮮において、労働党員になれないということは前途をすべて放棄することに等しかったのです。私の夫は、その覚悟を決めて私と結婚しました。

前述のとおり、私が「帰国」してから数年後から帰国者も労働党員になることができるようになり、帰国者と婚姻した者も労働党員になることができるようになりましたが、それでも出世する見込みはなく、差別の対象であることは変わりありませんでした。

北朝鮮において日本は帝国主義で野蛮な侵略者であると広く信じられていたため、子どもたちに自分が日本から来たことを告げることができませんでした。

### (2) 家族関係

私と夫は、夫の母と約10年間同居しましたが、その間、夫の母は一貫して、私と夫を離婚させようと私に対して嫌がらせをし続けました。近所の人たちからも、どうしてこんな仕打ちに耐えているのかと言われていたほどです。私は、これは単なる嫁姑の問題ではなく、帰国者である私と婚姻しているため

に夫が北朝鮮社会において虐げられているので、夫の母が私と夫を離婚させようとしているのだと理解していました。

私たち夫婦は夫が1998（平成10）年に事故で死亡するまで婚姻を継続し、1男4女をもうけました。

### （3）経済事情

私と夫の婚姻生活の経済事情は、非常に厳しいものでした。北朝鮮ではこの間一般的に経済状態は悪かったのですが、中でも特に、私が帰国者であったために夫も出世することができず、私も日本にいる家族に積極的に経済的援助を求めることはできなかつたため、私の家族の経済事情はとても厳しかったです。

日本に残った私の家族は時折衣類や家電製品を送ってくれたので、私たち夫婦はなんとか生活を維持することができました。しかし、私は、北朝鮮に来るなどメッセージを送った日本の家族に対し自分から経済援助を求めることがどうしてもできませんでした。そのため、私は、子どもたちに穴だらけ継ぎ接ぎだらけの服を着せ、米やトウモロコシの粒が飾りのような水ばかりの粥を食べさせるしかありませんでした。

## 1.2 保衛部による粛清

### （1）粛清のおそれ

北朝鮮では、体制に対する不満があるとみなされると粛清の対象となりました。例えば、自殺をすることは体制に不満があることだとして、遺族が収容所に送られるなど粛清の対象となりました。また、大人のみならず子どもでさえも、怪我をしたり怒られたりという明らかな理由がなく泣くことは社会に対する不満があるとみなされ、粛清の対象となり得ました。

保衛部に逮捕された場合には、理由などは一切尋ねることが許されておらず、殺害されても「国に悪いことをしたから処分した」と告げられるだけでした。

## (2) 密告のおそれ

上司や地位が上の人に歯向かうと、何かと理由をつけ収容所に送られるおそれがありました。私も、収容所に送られそうになったことが何度もありました。

例えば、私が国家品質管理員の仕事をしていた頃、スウェーデンに輸出するY シャツの品質チェックをすることになりました。当時北朝鮮の縫製の水準は低かったのですが、私には日本の水準がわかっていたため、スウェーデンも同様の水準でなければ輸出自体ができなくなると考え、厳しくチェックすることにしました。その代わりに、私自ら縫製員に縫製方法を指導し、水準を高めるようにしました。

ある日、私が許可しなかった製品の山がすべて、私の上司により許可されていました。私はこれに驚き、上司に対して問いました。すると、詳細は不明ですが、上司は保衛部に対し私を密告しました。

幸い、保衛部の調査に対して、複数の縫製員が私の品質チェックには問題がなく私は信頼できると答えたため、収容されずに済みました。

この時は辛くも難を逃れましたが、北朝鮮にいた43年間、このような密告を受ける恐れは常に感じていました。

## (3) 粛清された帰国者

私の知り合いも多く粛清の対象となり殺害されました。帰国者に対する差別と相まり、帰国者も多く殺害されています。理由があると判断された場合は、家族も処分の対象とされました。

例えば、ある東京出身者は水力発電所の設計グループに配属されていましたが、実際に建設する際に地盤検査が適切にされていなかったのが理由でダムの水が漏れてしまった時に、すべての罪を着せられて逮捕された上殺害されました。家族も全員保衛部に逮捕されました。

粛清された帰国者のうち1番の大物は、元京都府朝鮮総連本部議長のユン・トグであり、1番大量に粛清されたのは金日成死後、金正日による6軍団政府転覆事件に巻き込まれたウォンサン帰国者12粛清事件です。このように、帰国者が粛清された件は枚挙にいとまがありません。

### 1.3 出国の制限

北朝鮮からは、一時的であっても出国することが許されませんでした。平壤に居住していた高校の同級生は、日本にいたお父さんが亡くなる際に、どうしても息子に死に目に会わせて欲しいと、お母さんが朝鮮総連を通じて再三要求しましたが、結局聞き入れてもらえませんでした。そのお父さんは、北朝鮮に莫大な財産をつぎ込んだと聞いています。

### 1.4 1994年頃からの大飢饉

#### (1) 大飢饉の状況

北朝鮮の経済状態は、私が「帰国」した当時、すでに非常に悪いものでした。しかしそれでも、1994（平成6）年頃からの大飢饉の頃と比べたら圧倒的に良い状態でした。

大飢饉の頃には、私の住む都市でも街中に餓死した人々の遺体がゴロゴロと転がっている状態でした。都市に住んでいる人は自宅で死亡することが多かったのですが、遠くから食料を求めて都市に来た人々の多くは野外で死亡しました。鉄道の中や駅の待合室で死亡する人も多かったし、力尽きて道路で死亡する人も多くいました。遺体の処理は警察の担当であったため比較的迅速に処理が行われ、私の住んでいた都市では1日以上遺体が放置されることは珍しかったです。しかしそれでも、私自身も非常に多数の遺体を目にしました。

私が目にした餓死した遺体というのは、痩せこけてドロドロに汚れた身体に、これは衣服だったものなのだろうかというような身体以上にドロドロでボロボ

口になったものを纏い、履物はまったく履いていないことが多く、履いていても左右あっておらず、ぼうぼうに伸びた髪の毛は汗と垢と埃にまみれて団子状態になっており、その上を真っ白いシラミが大群で蠢いているような状態でした。私は、このような遺体を見るとあまりのその酷い状態に気絶しそうになりました。

人々は食べるために殺人・強盗・詐欺など何でもしました。そのためか、遺体の中にも、汽車から突き落とされて頭に重傷を負った子どもの遺体、殴られて身体中あざだらけの遺体、脚が切断された遺体など、酷い状態のものも多かったです。

私の知り合いもこの時期に多く死亡した。日本からの仕送りを受けられていなかったある帰国者の一家は、全員が飢え死にしました。日本の家族から仕送りを受けていた帰国者は比較的豊かな生活をしていましたが、私の友人の娘とその家族は、そのことを知っていた娘の友人に強盗に入られ全員殺害されました。

私は、このような状況を見ながら、なぜ自分は精神に異常を来さないのかと自分自身を疑っていました。事実、あまりに過酷な状況に耐えられずに精神に異常を来した人は多くいました。

## (2) 生き残る術

私は、子どもたちを餓死させないために出来ることはなんでもしました。本来は許されていませんでしたが、闇市で比較的裕福な労働党幹部などを対象とした食堂を経営したり、闇市で商売をしたりしてなんとかお金を得て食いつなぎました。

2000（平成12）年頃からは国連の支援物資が入るようになり、餓え死にをする者の数は減りました。支援物資は本来国民に無料で配給されることが予定されていたはずですが、私は支援物資を無料で受け取ったことは一度もあ

りませんでした。地位の高い人たちが必要以上に多く得て、闇市で売っていたからです。闇市では、ハム・ソーセージ・ビスケット・ハチミツなど、あらゆる国からの支援物資が販売されていました。北朝鮮の人々はチーズを食べる習慣がなかったため、ヨーロッパ産のチーズなどが二束三文で売られており、私は珍しがられながら多く購入していました。食糧がまったくないのと、有料でもお金を出せば買える物があるのとでは、まったく状況は違いました。

### (3) 大飢饉の原因

私は、北朝鮮が大飢饉に陥ったのは必然だと考えています。北朝鮮では政治のすべてがトップダウンで行われ、口を挟むと命を取られるというのが大袈裟ではない状態でした。

例えば、金日成が田植えを5月からやれと言えば、北の地域ではまだ田植えの時期には早く苗も十分に育っていないにも関わらず、全国で一斉にやっつけてしまいます。外貨獲得目的で芥子の栽培をすることにした際には、他の畑を一切放っておいて大勢を動員して山を開墾して芥子畑を作るなどが行われていました。

### (4) 脱北の決意

金日成が死亡した1994（平成6）年当時、すでに街には餓死者の遺体がゴロゴロしているような状態であったのにも関わらず、金正日は官邸として使われていた建物を霊廟とすることとし、新たに官邸を建設しました。このときにも人々は不平不満も述べずに、ただ餓死し続けるばかりでした。

私はこの状態を見て北朝鮮は内部から変わることは不可能だと悟り、外部から国際社会の圧力によって変えるしかないと考え、脱北することを決意しました。

## 1 5 脱北

私が脱北の決意をしてから2003年に決行するまで、約10年かかりました。この間、国境から遠くに居住していたため、その困難さを考えると脱北について考えることすら躊躇したこともありましたが、私は自分がいなくなっても子どもたちが生きていけるように、全員を結婚させるなど脱北の準備を進めました。情報が漏れると失敗し命を失う可能性が高かったため、私は自分一人で脱北の準備をして決行することとしました。

当時、国境地域の闇市には脱北ブローカーがいました。私も決行時にはブローカーを雇ったが、あらかじめ手配するのではなく、国境地域に行つてその場で見つけたブローカーを雇いました。

中朝国境の川を渡つてからは、中国国内に約1年半隠れ住んだ後、日本に入国することができました。

## 1 6 日本に帰つて来た後

私には子どもが5名、孫が7名いますが、脱北して現在日本に在住している子1名及び孫2名を除き、全員が現在も北朝鮮に残っています。私は、子どもや孫と直接会うことを切に望んでいますが、北朝鮮が私の子どもや孫に日本との自由往来を認めないため、私は脱北以来約15年間一度も会うことができていません。

子どもたちは、年に何度か平壤からコレクトコールで電話をしてきていましたが、3年程前から回数が減り、去年は1度、本年はまだ1度も電話がかかってきていません。

手紙は、もともとそれぞれの子から年に1回くらいずつ来ていましたが、昨年11月に1年数ヶ月ぶりに1通来て以来、1度も来ていません。監視が厳しくなっているということだと思っています。

日本に帰つてきて以来、私は2ヶ月に1回くらいずつ荷物や現金書留を北朝

鮮に残っている家族に送り続けています。しかし、現在ではそれが無事に届いているのかも不明です。

子どもや孫たちが無事にいるか、心配で毎晩眠れない夜を過ごしています。生きているうちに子どもや孫たちに会いたいです。

以上